試験研究は今　No.９４５

北海道のドジョウ漁獲量について

○はじめに

さけます・内水面水産試験場（旧：北海道立水産孵化場）では昭和 50 年代から各振興局および市町村の内水面漁獲量と生産金額を把握し、内水面漁業振興の基礎資料を得る目的で、内水面実態調査を行ってきました。本調査は道内の内水面漁業について魚種別に把握できる貴重な資料です。ところで、最近当部に北海道のドジョウの漁獲実態について、振興局や町村からいくつかの問い合わせが寄せられました。そこで、今回は北海道のドジョウの漁獲量について詳しく調べてみました。

○ドジョウについて

北海道にはドジョウ、フクドジョウ、エゾホトケの３種のドジョウがいます。このうち食用にするのはドジョウのみです。生息地は水田やそれに続く水路です。夏は水田の中にいて、秋の稲刈りの排水と共に水路へ移動して泥に潜ってそのまま越冬します。昔は水田と水路をドジョウが自由に行き来できましたが、現在では水田の改良が進み、行き来が難しくなっていると考えられています。

○ドジョウの漁獲について

最近までのドジョウの全道の漁獲量を図１に示しています。1980 年代から 1990 年代半ばくらいまでが最盛期であったことがわかります。ここでは最盛期の 1982～1996 年の 15 年間の漁獲量と内訳を詳しく見ていきます。

図２は最盛期にドジョウが漁獲された地域、図３は振興局別のドジョウの漁獲量の推移を表しています。ただ、空知の許可漁業の 1988 年の調査結果だけは見つからず、全体の漁獲量から他の漁獲量を引いた推定値となっています。漁獲量の一番多かった年は 1992 年の 33 トン、次に多かった年は 1983 年の 30 トンでした。一番多くドジョウを漁獲していたのが空知で全道の 47～98%（12～20 トン）となっています。次いで石狩（0～52%、0～16 トン）、胆振（1～6%、0～1 トン）と続き、網走、宗谷、留萌は単年のみで、それぞれ 1995 年、1985 年、1993 年に 1.6 トン、0.3 トン、0.5 トンでした。

図４は漁業権別のドジョウ漁獲件数の推移を表しています。ほとんどが許可漁業で、一部が区画漁業権、わずかに共同漁業権で漁獲されていました。共同漁業権は、1985 年のクッチャロ湖の流入河川と 1993 年の石狩管内の河川の１件ずつのみでした。ここでの許可漁業は内水面の知事許可漁業で、場所を特定しない漁業権です。ドジョウは水田やその周辺に多くいるため、許可漁業が多かったというわけです。ここで、一番漁獲量の多かった空知の漁獲量を市町村別に見てみます（図５）。空知では、北村で一番多く漁獲されており、美唄市がこれに続きます。

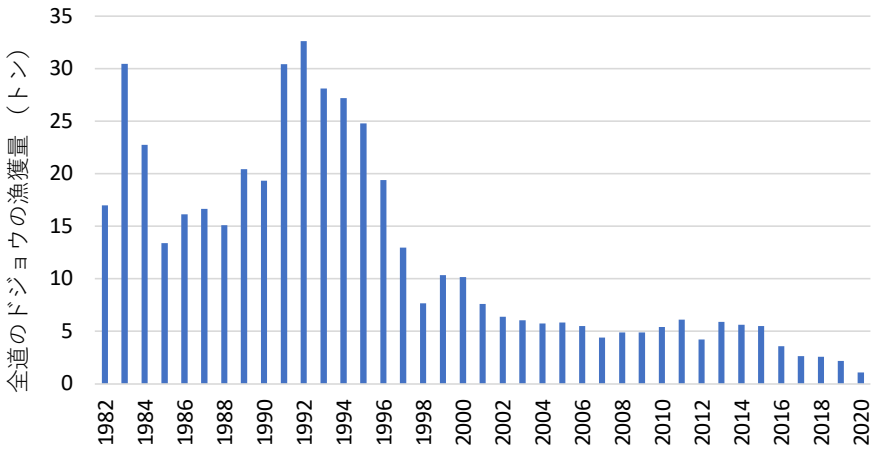

図１　全道のドジョウ漁獲量の推移

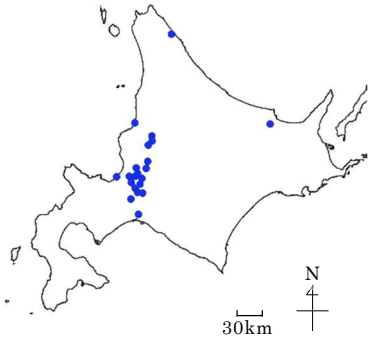

図２　最盛期にドジョウの漁獲のあった地域

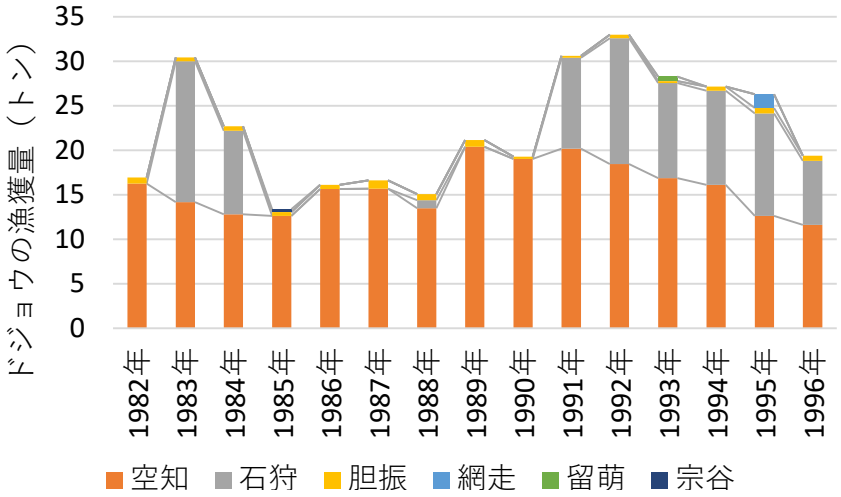

図３　振興局別のドジョウ漁獲量の推移
（1988 年の空知は推定値）

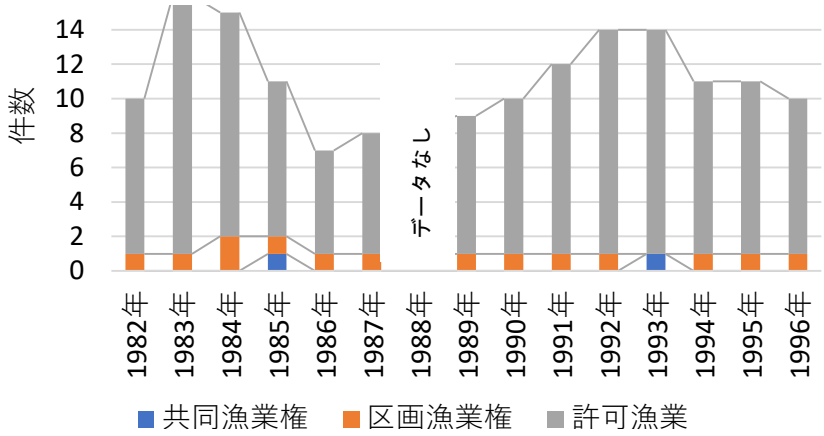

図４　漁業権別のドジョウ漁獲件数

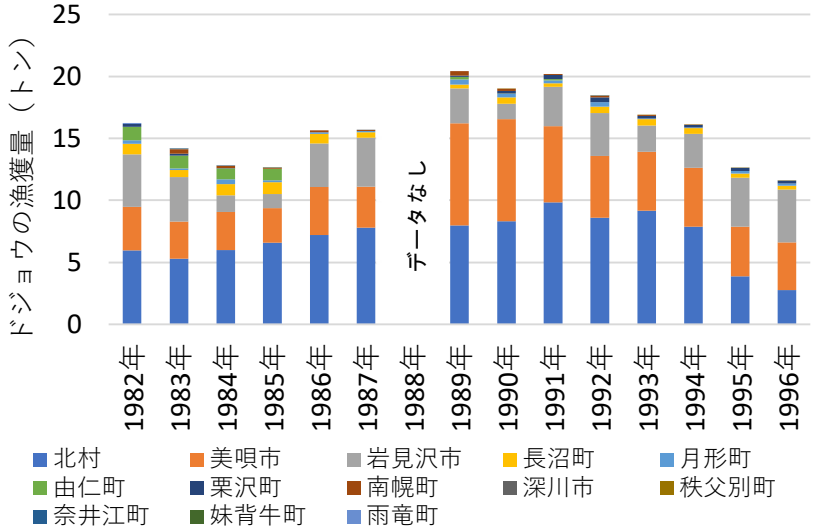

図５　空知管内のドジョウ漁獲量の推移

○現在のドジョウは？

現在では、ドジョウの漁獲量は減少し、漁業を行っているのは空知だけとなりました。最新の実態調査結果では、2020 年にドジョウを漁獲したのは許可漁業を営む６任意団体で、全部で約１トンでした。そのうちの大部分は５名からなる岩見沢市どじょう生産組合です。つまり、北海道のドジョウはほとんどこの１団体による漁獲ということになります。空知では大規模な水田の改良は昭和 50 年代に完了しており、その後は小さな水路の改修が行われてきたそうです。そのために資源量の減少が著しいですが、現在でも水路で泥のたまる場所にドジョウがいるらしく、今でも 170 程のポイントがあるそうです。

1988 年まで漁獲量の多かった石狩の恵庭土地改良区は既に住宅街になっており、この地域のドジョウはほとんどいなくなったと思われます。ドジョウは全国的にみても減少しており、2018 年からは環境省のレッドリストに準絶滅危惧種として記載されています。

今後も、道内におけるドジョウの漁獲実態について把握して行きたいと思います。

（2022 年１月 14 日　北海道立総合研究機構　さけます・内水面水産試験場　内水面資源部
室岡瑞恵）